２０１１年度　修士論文

過疎地域の総合型地域スポーツクラブにおける会員参加型運営に関する研究

－吉野スポーツクラブを事例として－

A study on member’s participation in club management

for comprehensive community sports club in depopulated area：

A case study of Yoshino sports club

早稲田大学　大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　スポーツビジネス研究領域

５０１０Ａ０７５－２

福田　雄介

Fukuda　Yusuke

研究指導教員：間野　義之　教授

目次

Ⅰ部　研究小史

1．総合型地域スポーツクラブ 1

2．組織コミットメント 2

3．地域愛着 3

4．集団凝集性 4

Ⅱ部　研究論文

Ⅰ．緒言 1

1．研究背景 1

2．研究目的 3

Ⅱ．研究方法 4

1．調査概要 4

2．調査項目 4

(1) 運営参加意志に関する項目 5

(2) 組織コミットメントに関する項目 5

(3) 集団凝集性に関する項目 6

(4) 地域愛着に関する項目 7

4．分析方法 8

(1) 関連要因の検証 8

(2) 規定要因の検証 8

(3) 会員参加型運営モデルの検証 8

(4) 統計解析 8

Ⅲ．結果および考察 9

1．人口統計学的特性 9

2．クラブ活動頻度 9

3．尺度の妥当性および信頼性の検討 10

(1) 組織コミットメント尺度 10

(2) 集団凝集性尺度 10

(3) 地域愛着尺度 11

4．組織コミットメントの関連要因・規定要因の検証 12

(1) 組織コミットメントの関連要因の検証 12

(2) 組織コミットメントの規定要因の検証 12

(3) まとめ 13

4．地域愛着の関連要因・規定要因の検証 14

(1) 地域愛着の関連要因の検証 14

(2) 地域愛着の規定要因の検証 14

(3) まとめ 15

5．運営参加意志の関連要因・規定要因の検証 16

(1) 運営参加意志の関連要因の検証 16

(2) 運営参加意志の規定要因の検証 16

(3) まとめ 17

6. 会員参加型運営モデルの検証 18

V. 結論 19

1. まとめ 19

2. 実践的示唆 19

3. 研究課題 20

引用・参考文献 21

Ⅰ部　研究小史

1. 総合型地域スポーツクラブ

文部科学省は，新たなスポーツ文化の確立を目指し，2010 年に「スポーツ立国戦略」を策定した．スポーツ立国戦略(文部科学省，2010)によると，総合型地域スポーツクラブ(以下「総合型クラブ」と略す)を中心とした地域スポーツ環境の整備が施策の一つとして挙げられている．

総合型クラブの設立による地域活性化効果として，「地域コミュニティの形成」「誇り・愛着の形成」が最も大きい効果であり(堤ら, 2003)，地域に「信頼関係」「親密感」といったソーシャルキャピタルの蓄積を生むことで少なからず地域づくりに貢献している(曾根・折本, 2008).

非営利組織(NPO)型の総合型クラブが主体となり，地域スポーツ環境全体を整備することが期待されており，自主運営によるスポーツ振興とまちづくりが総合型クラブの育成と運営における基盤となっている(中西ら, 2011)．しかし，総合型クラブの NPO 法人化は，運営改善や地域への浸透に有効な手段の一つではあるが，スポーツサービスを提供するだけのクラブになり，総合型クラブの理想からかけ離れていく危険性を含んでいる(内藤, 2007).

過疎農村地域において学校・自治会域程度の範域で行われるスポーツ活動が，スポーツネットワークの構築・活用により地域づくりの一手法として機能している(斎尾・宮川, 2006)．また，後藤(2008)は，農山村における総合型クラブはスポーツ活動を通して既存の生活構成集団の機能やネットワークを強化する役割を担う必要があり，単なるスポーツを目的とした総合型クラブの普及は農山村の集団性・地域性といった人々の関係性を分断す

る可能性があることを示唆している.

谷口・内倉(2010)は, 地域スポーツが未だに従来までの「行政主導」から「住民主導」への完全な方向転換に至っていないことを指摘し, 多くの総合型クラブが「財源の確保」「運営ボランティアの確保」「指導ボランティアの確保」を最大の課題として挙げている(窪田ら, 2010)ことから, 総合型クラブにおける自主運営の難しさが伺える. 総合型クラブにおける自主運営は, できるだけ多くの会員参加によるクラブ運営と定義され(作野, 2002), 様々な会員が役割を担うことがクラブ運営の活性化につながるとされている.

2. 組織コミットメント

長積ら(1998)は, 総合型クラブの自主運営における戦略的課題について検討し, 組織コミットメントが強い会員ほどクラブ運営に対する協力意志が高い傾向があることから, クラブの運営組織や事業展開は一人でも多くの住民を巻き込み, コミットさせることが重要であると指摘している. また, スポーツ・ボランティアの組織コミットメントは, 個人的な属性や組織におけるポジション・役割によって違いが見られる(北村ら, 2005). 以上のことから, 組織コミットメントは, 総合型クラブの自主運営について検討する際に重要な概念であるといえる.

組織コミットメントについて, Mowday et al(1979)は「組織への同一視や関与の強さ」と定義し, Cook and Wall(1980)は「同一視」「関与」「忠誠心」の 3 つの要素として捉えている. また, 小玉・戸梶(2010)は, 組織コミットメントと組織同一視における概念の類似性から, 概念統合の可能性について言及している.

組織コミットメント研究は，より大なる生産を従業員が提供する要因の検討が中心である(石田, 1997). 組織コミットメントを測定する尺度として, Allen & Meyer(1990)の 3 次元組織コミットメント尺度が代表的である. 3 次元組織コミットメント尺度は，「情動的コミットメント」「継続的コミットメント」「規範的コミットメント」で構成され，一般的に企業と従業員の関係を検証する際に用いられている．また，橋本ら(2010)は, 3 次元組織コミットメント尺度をもとに，大学生サークルのような準組織的集団を対象とした「サークル・コミットメント」尺度を開発した．サークル・コミットメント尺度は，「情緒的コミットメント」「規範的コミットメント」「同一視コミットメント」の 3 因子 12 項目で構成される.

総合型クラブは，自主運営の観点から大学生サークルのような準組織的集団として捉えることができる．そのため，総合型クラブを対象に会員の組織コミットメントを測定する場合, 3 次元組織コミットメント尺度よりサークル・コミットメント尺度を用いる方が適切であるといえる.

3. 地域愛着

鈴木・藤井(2008)は地域愛着が高い人ほど町内会活動やまちづくり活動などの地域への活動に熱心な傾向があり，地域内での協力活動への参加を促す動機となることを明らかにしている．総合型クラブは地域のまちづくり活動にも積極的に取り組んでおり，クラブ活動を地域活動として捉えることができる．また，石盛(2004)によると，地域への愛着が高い人ほど地域活動に積極的に参加する傾向がある.そのため，地域愛着は，総合型クラブの

活動について検討する際に重要な概念であるといえる.

地域愛着は，一般的に「人々と特定の地域をつなぐ感情的な絆」(Hidalgo & Hernandez, 2001)と定義される．渡邊(2006)は，「政策評価」「地域の人間関係の程度」「居住年数」が地域への愛着度に影響を与えていることを明らかにしている．また，引地ら(2009)は，地域の社会的環境と物理的環境が地域への愛着を高める効果は，居住年数が愛着を高める効果より大きいことを指摘している.

鈴木･藤井(2008)は，交通行動が地域風土との接触量を規定し，地域風土と関わることで地域愛着が高まることから，交通行動が風土接触度を介して地域愛着に影響を与えていることを指摘している．また，消費行動も交通行動と同様に，風土接触度を介して地域愛着に影響を与えている(鈴木・藤井, 2008).

鈴木・藤井(2007)は，地域愛着は当該地域内の個々の店舗への愛着に影響されることを明らかにしている．プロスポーツ観戦行動においても，チームに対する愛着とホームタウンへの地域愛着に関連があり(二宮, 2011)，岸(2011)はチームへの愛着が地域愛着を高めることを示唆している．このことから，総合型クラブへの愛着が地域愛着に影響を与えている可能性が考えられる.

4. 集団凝集性

組織コミットメントの規定要因の一つである集団凝集性は，一般的に「成員が集団にとどまるように作用する心理的力の総量」(Festinger et al., 1963)と定義される．また，成員が集団を全体的な統一体として捉えているかという点と集団に対して感じる個人的な魅力

という点の 2 側面から構成され(Widmeyer et al., 1985), 橋本ら(2010)は後者の個人的魅力の項目のみを調査項目として採用し, 大学生サークルの集団凝集性について測定した. さらに, 成員がどれだけ集団の目標や活動内容に満足しているかを表す課題志向の次元と, 成員が集団の他のメンバーにどれだけ好意を持っているか表す成員の次元に区別している. (橋本ら, 2010).

阿江(1987)はスポーツ集団の凝集性について, 対人凝集と課題凝集というように少なくとも 2 次元以上の要因を含む概念であることを明らかにしている. また, 冨永・田口(2006)は, 大学運動部の集団凝集性に着目し, 「部への愛着」「部との同一化」「部優先への抵抗感」「部への賛同」の 4 因子を抽出し, 「学年」「出場頻度」「部内の役割」によって有意差があることを指摘している.

Ⅱ部　研究論文

Ⅰ．緒言

1．研究背景

文部科学省は，新たなスポーツ文化の確立を目指し，2010 年に「スポーツ立国戦略」を策定した．スポーツ立国戦略(文部科学省, 2010)によると，総合型地域スポーツクラブ(以下「総合型クラブ」と略す)を中心とした地域スポーツ環境の整備が施策の一つとして挙げられている．また，非営利組織(NPO)型の総合型クラブが主体となり，地域スポーツ環境全体を整備することが期待されており，自主運営によるスポーツ振興とまちづくりが総合型クラブの育成と運営における基盤となっている(中西ほか, 2011)．総合型クラブにおける自主運営は，できるだけ多くの会員参加によるクラブ運営と定義され(作野, 2002)，様々な会員が役割を担うことがクラブ運営の活性化につながるとされている．また，クラブの運営課題として「運営ボランティアの確保」を挙げるクラブが多い(窪田ほか, 2010)ことから，会員参加型運営が経営学的に注視されている(村田, 2008)．

長積ほか(1998)は，総合型クラブの自主運営における戦略的課題について検討し，組織コミットメントが強い会員ほどクラブ運営に対する協力意志が高い傾向があることから，クラブの運営組織や事業展開は一人でも多くの住民を巻き込み，コミットさせることが重要であると指摘している．

組織コミットメントの研究領域において，組織コミットメントの高い人ほど離脱意思が低く，組織に対してより積極的な行動をとる傾向があり，規定要因として成員の組織に関与する度合いや成員同士の団結力や一体感を表す集団凝集性が挙げられている．橋本ほか

(2010)は，大学生サークルを対象に，集団凝集性が組織コミットメントに影響を与えていることを明らかにしており，総合型クラブにおいても同様の結果が得られる可能性が考えられる．また，組織に関与する度合いの指標であるクラブ活動頻度が組織コミットメントの規定要因として考えられる．

鈴木・藤井(2008)は地域愛着が高い人ほど町内会活動やまちづくり活動などの地域への活動に熱心な傾向があり，地域内での協力活動への参加を促す動機となることを明らかにしている．総合型クラブは地域のまちづくり活動にも積極的に取り組んでおり，クラブ活動を地域活動として捉えることができる．そのため，総合型クラブにおいても地域愛着が運営参加意志の規定要因となる可能性が考えられる．

総合型クラブと地域愛着の関係において，「地域コミュニティの形成」「誇り・愛着の形成」が地域活性化における最も大きい効果であり(堤ほか, 2003)，地域への愛着が高い人ほど地域活動に積極的に参加する傾向がある(石盛, 2004)ことから，総合型クラブでの活動頻度が地域愛着に影響を与えている可能性が考えられる．また，渡邊(2006)によると，地域に対する愛着度は人間関係の程度に影響されることから，総合型クラブにおける集団凝集性が地域愛着に影響を与えている可能性が考えられる．

以上を整理すると，運営参加意志の規定要因として「組織コミットメント」「地域愛着」が挙げられ，それら 2 つの規定要因である「クラブ活動頻度」「集団凝集性」も間接的に影響を与えている可能性が示唆される．会員参加型運営について検証することにより，スポーツ環境の整備が遅れている地域において，自主運営による総合型クラブの普及に寄与できる可能性が考えられる．

奈良県は, 2010 年時点で総合型クラブの普及率が約 41%と全国の中で最低であり, 地域スポーツ環境の整備が遅れている. 特に, 過疎化による社会問題を抱える吉野郡では, 全 11 町村のうち 10 町村が未設置であり, 総合型クラブの育成が急務となっている. 吉野郡で唯一設置されている NPO 法人「吉野スポーツクラブ」(吉野町)では, クラブマネジャーの配置など運営体制は整っているものの, 運営スタッフなどの人的資源の確保が課題の一つとして挙げられている(高橋ら, 2004). しかし, 人口が 1 万人にも満たない吉野町のような過疎地域では, クラブ運営に携わる新たな人材の確保が困難なため, 会員参加型運営が求められる.

2. 研究目的

本研究では, 過疎地域の総合型クラブにおける会員参加型運営に着目し, 「組織コミットメント」「地域愛着」「運営参加意志」の関連要因・規定要因を明らかにしたうえで, 会員参加型運営モデルについて検証することを目的とする.

表1　研究仮説

仮説①	運営参加意志は組織コミットメントに規定される
仮説②	運営参加意志は地域愛着に規定される
仮説③	組織コミットメントはクラブ活動頻度に規定される
仮説④	組織コミットメントは集団凝集性に規定される
仮説⑤	地域愛着はクラブ活動頻度に規定される
仮説⑥	地域愛着は集団凝集性に規定される

Ⅱ．研究方法

1．調査概要

本調査は，吉野スポーツクラブに所属する高校生以上の活動会員 142 名を対象に，2011 年 11 月 14 日から 12 月 2 日にかけて訪問留置法による質問紙調査を行い，吉野町在住かつ分析に必要な項目について完全回答している 112 部を分析対象とした．

表2　吉野スポーツクラブの概要

名称	NPO法人 吉野スポーツクラブ
設立	2003年8月19日
法人格取得	2010年7月8日
所在地	奈良県吉野郡吉野町
活動場所	吉野運動公園施設，学校開放施設(中学校1，小学校2)
活動種目	27種目
会員数	559名

2．調査項目

調査項目は，人口統計学的変数(性別，年齢，居住地，居住年数)，クラブ活動頻度，運営参加意志に関する 10 項目，組織コミットメントに関する 12 項目，集団凝集性に関する 6 項目，地域愛着に関する 13 項目を設定した．居住地は，郵便番号から個人を特定できる可能性があるため，「吉野町内」「吉野町外」の二択形式で質問した．クラブ活動頻度は，週・月・年いずれかの活動回数で質問し，回答を 1 年＝52 週・12 ヶ月として活動回数／年に統一した．

(1) 運営参加意志に関する項目

運営参加意志に関する項目は，長積ほか(1998)のクラブ運営への協力意志 10 項目を設定し，「1. 協力したくない－4. 協力したい」の 4 段階で質問した(表 3). 長積ほか(1998)が総合型クラブの会員を対象に設定した項目であるため，質問項目として妥当であるといえる.

表3　運営参加に関する項目

No.	項目
1	新しいクラブ会員の確保
2	企画されたプログラムの運営・進行の手伝い
3	会員への連絡・調整
4	クラブの宣伝・PR活動
5	教室やイベントの企画
6	スポーツの指導
7	施設・設備・用具等の管理
8	クラブ運営のための資金確保
9	クラブが行う事業の計画・立案
10	集められたお金の管理・会計

(2) 組織コミットメントに関する項目

組織コミットメントに関する項目は，橋本ほか(2010)のサークル・コミットメント尺度 12 項目を用い，「1. 全くあてはまらない－5. とてもよくあてはまる」の 5 段階で質問した(表 4). 有効性のある組織コミットメント尺度として, Allen & Meyer (1990) が開発した 3 次元組織コミットメント尺度が一般的であるといわれているが，勤務態度など企業に対する従業員の関係を対象に用いられるため，本研究の尺度として妥当でないと考えられる. 橋本ほか(2010)は 3 次元組織コミットメント尺度をもとに，大学生サークルを対象としたサークル・コミットメント尺度を開発した. 本研究では，総合型クラブを自主運営という

観点から大学生サークルのような準組織的集団として捉え，サークル・コミットメント尺度を質問項目に設定した．また，組織コミットメントを「ある特定の組織に対する個人の同一化および関与の強さ」(Porter et al., 1974)と定義した．

表4　組織コミットメントに関する項目

No.	項目
1	これからも、喜んでこのクラブの一員であり続けたい
2	このクラブに対する情緒的な愛着は特に感じない※
3	このクラブは、自分にとって大いに意味のある存在だ
4	このクラブは、自分にとって家族のようなものだ
5	今このクラブをやめたら、罪悪感を覚えるだろう
6	せっかくここまでやってきたのだから、今更このクラブをやめられない
7	クラブの他のメンバーに悪いので、今やめようとは思わない
8	このクラブをやめたいと思ったとしても、今やめるのはとても難しいだろう
9	自分は、このクラブへの忠誠心を割と持っている
10	このクラブの一員であるということを強く意識している
11	このクラブは、自分が所属するクラブの中で、最も重要だと感じる集団の一つだ
12	このクラブの問題は、あたかも自分自身の問題であるかのように感じる

※は反転項目

(3) 集団凝集性に関する項目

集団凝集性に関する項目は，橋本ほか(2010)の集団凝集性尺度 6 項目を用い，「1. 全くあてはまらない－5. とてもよくあてはまる」の 5 段階で質問した(表 5)．組織コミットメントに関する項目と同様に，大学生サークルを対象とした集団凝集性尺度を質問項目に設定した．また，集団凝集性を「集団に対して感じる個人的な魅力」(Widmeyer et al., 1985)と定義した．

表5　集団凝集性に関する項目

No.	項目
1	このクラブよりも、別の集団といる方が楽しい※
2	自分の最も仲の良い友人の何人かは、クラブ内にいる
3	食事や飲み会など、このクラブの交流的活動に参加しても、自分は楽しめない※
4	クラブが活動していないときに、他のメンバーに会えない寂しさを感じることはない※
5	このクラブの目標達成へのモチベーションの程度に不満を感じる※
6	このクラブの活動スタイルが好きではない※

※は反転項目

(4) 地域愛着に関する項目

地域愛着に関する項目は，多くの先行研究で使用されている鈴木・藤井(2008)の地域愛着尺度 13 項目を用い，「1. 全くあてはまらない－5. とてもよくあてはまる」の 5 段階で質問した(表 6). また，地域愛着を「人々と特定の地域をつなぐ感情的な絆」(Hidalgo & Hernandez, 2001)と定義した.

表6　地域愛着に関する項目

No.	項目
1	地域は住みやすいと思う
2	地域にお気に入りの場所がある
3	地域を歩くのは気持ちよい
4	地域の雰囲気や土地柄が気に入っている
5	地域が好きだ
6	地域ではリラックスできる
7	地域は大切だと思う
8	地域に愛着を感じている
9	地域に自分の居場所がある気がする
10	地域は自分のまちだという感じがする
11	地域にずっと住み続けたい
12	地域にいつまでも変わってほしくないものがある
13	地域になくなってしまうと悲しいものがある

4. 分析方法

(1) 関連要因の検証

「組織コミットメント」「地域愛着」「運営参加意志」の関連要因について，それぞれの平均点を基準に高群・低群の 2 群に分類し，高群・低群による独立変数の平均値の差を検定(t 検定)した.

(2) 規定要因の検証

「組織コミットメント」「地域愛着」「運営参加意志」の規定要因について，強制投入法による重回帰分析を行い，標準化係数を指標に影響度を比較した.

(3) 会員参加型運営モデルの検証

関連要因・規定要因の検証結果をもとに共分散構造分析を行い，会員参加型運営モデルについて検証する．モデルの適合度は, GFI (基準値≧.900), AGFI (基準値≧.900), CFI (基準値≧.900), RMSEA (基準値＜.100)を指標に判断する.

(4) 統計解析

統計解析パッケージは, IBM SPSS Statistics19 および IBM SPSS Amos19 を使用し，有意確率 5%未満を判断基準とした.

Ⅲ．結果および考察

1．人口統計学的特性

回答者の人口統計学的特性は，表 7 に示す通りである．男性が 58.0%，女性が 42.0%であった．年齢は 70 代が最も多く，平均年齢は 68.3 歳であった．居住年数は 70 年以上が最も多く，平均居住年数は 51.5 年であった．

表7　人口統計学的特性

		N	%	平均値	最小値	最大値	標準偏差
性別	男性	65	58.0				
	女性	47	42.0				
年齢	50歳未満	12	10.7	68.3歳	16歳	88歳	13.85
	50－59歳	14	12.5				
	60－69歳	13	11.6				
	70－79歳	54	48.2				
	80歳以上	19	17.0				
居住年数	30年未満	23	20.5	51.5年	3年	88年	22.86
	30－49年	24	21.4				
	50－69年	27	24.1				
	70年以上	38	33.9				

2．クラブ活動頻度

回答者のクラブ活動頻度(回／年)は，表 8 に示す通りである．活動回数は 48－95 回／年が最も多く，平均活動回数は 87.5 回／年(週 1 回－2 回未満)であった．

表8　クラブ活動頻度(回／年)

	N	%	平均値	最小値	最大値	標準偏差
48回未満	18	16.1	87.5回	3回	260回	54.36
48－95回	37	33.0				
96－143回	36	32.1				
144回以上	21	18.8				

3. 尺度の妥当性および信頼性の検討

(1) 組織コミットメント尺度

橋本ら(2010)のサークル・コミットメント尺度の妥当性を検証するため，確認的因子分析を行った．確認的因子分析によるモデル適合度は，GFI=.800，AGFI=.694，CFI=.846，RMSEA=.149 となり，すべてが基準値を満たさなかった．そのため，因子負荷量が低い 2 項目と他因子との相関が高い 4 項目を恣意的に削除し，再度確認的因子分析を行った．その結果，GFI=.974，AGFI=.909，CFI=.990，RMSEA=.067 とすべてが基準値を満たし，Cronbach の α 係数も高いことから 3 因子 6 項目(表 9)を採用した．

表9　組織コミットメント尺度

因子	項目	Cronbachのα係数
情緒的	これからも、喜んでこのクラブの一員であり続けたい	.701
	このクラブは、自分にとって大いに意味のある存在だ	
規範的	今このクラブをやめたら、罪悪感を覚えるだろう	.729
	せっかくここまでやってきたのだから、今更このクラブをやめられない	
同一視	このクラブの一員であるということを強く意識している	.852
	このクラブは、自分が所属するクラブの中で、最も重要だと感じる集団の一つだ	

(2) 集団凝集性尺度

橋本ら(2010)の集団凝集性尺度の妥当性を検証するため，確認的因子分析を行った．確認的因子分析によるモデル適合度は，GFI=.966，AGFI=.910，CFI=.971，RMSEA=.068 とすべてが基準値を満たし，Cronbach の α 係数も高いことから 2 因子 6 項目(表 10)をそのまま採用した．

表10　集団凝集性に関する項目

因子	項目	Cronbachのα係数
成員	このクラブよりも、別の集団といる方が楽しい	.672
	自分の最も仲の良い友人の何人かは、クラブ内にいる	
	食事や飲み会など、このクラブの交流的活動に参加しても、自分は楽しめない	
	クラブが活動していないときに、他のメンバーに会えない寂しさを感じることはない	
課題	このクラブの目標達成へのモチベーションの程度に不満を感じる	.622
	このクラブの活動スタイルが好きではない	

(3) 地域愛着尺度

鈴木・藤井(2008)の地域愛着尺度の妥当性を検証するため，確認的因子分析を行った．確認的因子分析によるモデル適合度は，GFI=.866, AGFI=.803, CFI=.936, RMSEA=.098 と 2 つが基準値を満たし，Cronbach の α 係数も高いことから 3 因子 13 項目(表 11)をそのまま採用した．

表11　地域愛着に関する項目

因子	項目	Cronbachのα係数
選好	地域は住みやすいと思う	.903
	地域にお気に入りの場所がある	
	地域を歩くのは気持ちよい	
	地域の雰囲気や土地柄が気に入っている	
	地域が好きだ	
	地域ではリラックスできる	
感情	地域は大切だと思う	.895
	地域に愛着を感じている	
	地域に自分の居場所がある気がする	
	地域は自分のまちだという感じがする	
	地域にずっと住み続けたい	
持続願望	地域にいつまでも変わってほしくないものがある	.815
	地域になくなってしまうと悲しいものがある	

4. 組織コミットメントの関連要因・規定要因の検証

(1) 組織コミットメントの関連要因の検証

表 12 は, 組織コミットメント高群･低群におけるクラブ活動頻度および集団凝集性の平均値の差を検定した結果である. 高群・低群間では, 「クラブ活動頻度」「集団凝集性」ともに高群の方が 0.1%水準で有意に高い結果となった.

表12　組織コミットメント高群・低群による平均値の差

	組織コミットメント				t値
	高群 N=64		低群 N=48		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
クラブ活動頻度	107.16	54.00	61.25	42.89	4.85 ＊＊＊
集団凝集性	24.34	3.60	20.31	3.18	6.17 ＊＊＊

＊＊＊p＜0.001

(2) 組織コミットメントの規定要因の検証

図 1 は, 目的変数を「組織コミットメント」, 説明変数を「クラブ活動頻度」「集団凝集性」に設定し, 重回帰分析を行った結果である. 「クラブ活動頻度」「集団凝集性」ともに有意に正の影響を与えており, 集団凝集性の方が影響度が高い結果となった.

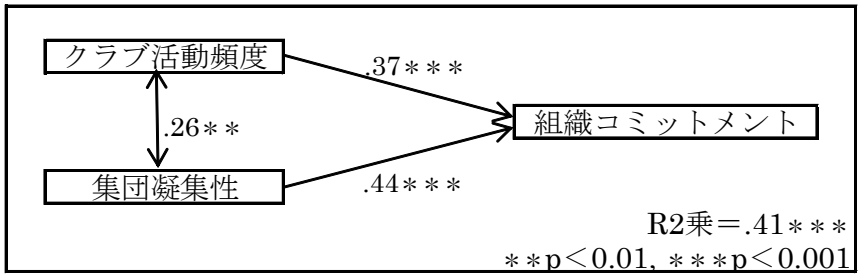

図1　組織コミットメントを目的変数とした重回帰分析

(3) まとめ

組織コミットメントの関連要因を検証した結果，「クラブ活動頻度」「集団凝集性」ともに組織コミットメント高群･低群間で有意な差が見られた．組織コミットメントの高い方がクラブ活動頻度が高い傾向が明らかとなった．組織コミットメントは，「ある特定の組織に対する個人の同一化および関与の強さ」(Porter et al., 1974) と定義されることから，組織に関与する度合いに左右されると考えられるため，クラブでの活動頻度が影響を与えていると推察される．また，組織コミットメントの高い方が集団凝集性が高い傾向が明らかとなった．橋本ほか(2010)は，大学生サークルにおいて組織コミットメントと集団凝集性に関連性があることを明らかにしており，総合型クラブにおいても同様の結果が得られた．

組織コミットメントの関連要因を検証した結果，「クラブ活動頻度」「集団凝集性」ともに組織コミットメントに有意に正の影響を与えており，影響度はクラブ活動頻度より集団凝集性の方が高かった．また，クラブ活動頻度と集団凝集性において相関関係にあることから，総合型クラブで活動することにより，集団と関わる機会が増え，集団との結びつきが強くなることが推察される．そのため，クラブ活動頻度は集団凝集性を介して組織コミットメントに影響を与えている可能性が考えられる．

4. 地域愛着の関連要因・規定要因の検証

(1) 地域愛着の関連要因の検証

表 13 は，地域愛着高群･低群におけるクラブ活動頻度および集団凝集性の平均値の差を検定した結果である．高群・低群間では，「クラブ活動頻度」「集団凝集性」ともに高群の方が有意に高い結果となった．

表13　地域愛着高群・低群による平均値の差

	地域愛着				t値
	高群 N=59		低群 N=53		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
クラブ活動頻度	98.27	60.60	75.47	43.95	2.30 ＊
集団凝集性	24.08	3.73	20.98	3.57	4.49 ＊＊＊

＊p＜0.05, ＊＊＊p＜0.001

(2) 地域愛着の規定要因の検証

図 2 は，目的変数を「地域愛着」，説明変数を「クラブ活動頻度」「集団凝集性」に設定し，重回帰分析を行った結果である．集団凝集性のみ有意に正の影響を与えており，集団凝集性の方が影響度が高い結果となった．

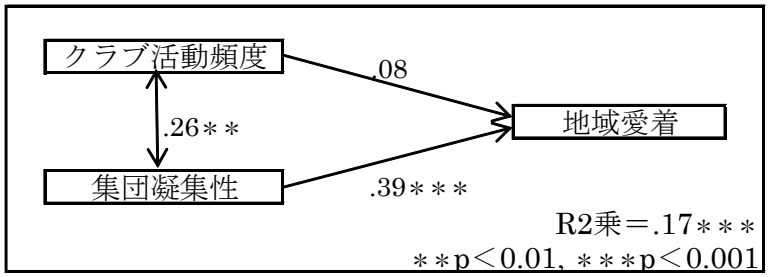

図2　地域愛着を目的変数とした重回帰分析

(3) まとめ

地域愛着の関連要因を検証した結果，「クラブ活動頻度」「集団凝集性」ともに地域愛着高群･低群間で有意な差が見られた．地域愛着の高い方がクラブ活動頻度が高い傾向が明らかとなった．鈴木・藤井(2008)は風土接触度が高い人ほど地域愛着が高いことを明らかにしており，クラブで活動することで地域風土と接触する機会が多くなり，地域愛着が高くなることが推察される．また，地域愛着の高い方が集団凝集性が高い傾向が明らかとなった．集団凝集性は「集団における他のメンバーへの好意の度合い」「集団の目標や活動内容への満足度」の 2 点によって構成されており(Widmeyer et al., 1985)，地域での人間関係の程度が地域への愛着度に影響を与える(渡邊，2006)ことから，総合型クラブにおける集団凝集性が地域愛着に影響し，クラブ活動が地域における人間関係の形成に大きく関わっていることが推察される．

地域愛着の規定要因を検証した結果，「クラブ活動頻度」「集団凝集性」ともに地域愛着に正の影響を与えており，集団凝集性のみに因果関係が見られた．クラブにおけるメンバー同士のつながりの指標となる集団凝集性の影響度が高いことから，クラブでの人間関係が地域での人間関係の大部分を占めている可能性が考えられる．また，クラブ活動頻度が地域愛着の規定要因とならなかったことから，「風土接触度」など他の変数を介して間接的に影響を与えている可能性が考えられる．

5. 運営参加意志の関連要因・規定要因の検証

(1) 運営参加意志の関連要因の検証

表 14 は，運営参加意志高群・低群における「組織コミットメント」「地域愛着」「クラブ活動頻度」「集団凝集性」の平均値の差を検定した結果である．高群・低群間では，「組織コミットメント」「地域愛着」「クラブ活動頻度」「集団凝集性」すべてにおいて高群の方が有意に高い結果となった．

表14　運営参加意志高群・低群による平均値の差

	運営参加意志				t値
	高群 N=59		低群 N=53		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
組織コミットメント	25.85	3.60	21.81	4.70	5.06 ＊＊＊
地域愛着	55.92	7.47	49.89	10.95	3.37 ＊＊
クラブ活動頻度	103.79	58.15	69.43	43.65	3.55 ＊＊
集団凝集性	23.80	4.24	21.30	3.15	3.50 ＊＊

数値：平均値　　＊＊p＜0.01, ＊＊＊p＜0.001

(2) 運営参加意志の規定要因の検証

図 3 は，目的変数を「運営参加意志」，説明変数を「組織コミットメント」「地域愛着」に設定し，重回帰分析を行った結果である．「組織コミットメント」「地域愛着」ともに有意に正の影響を与えており，組織コミットメントの方が影響度が高い結果となった．

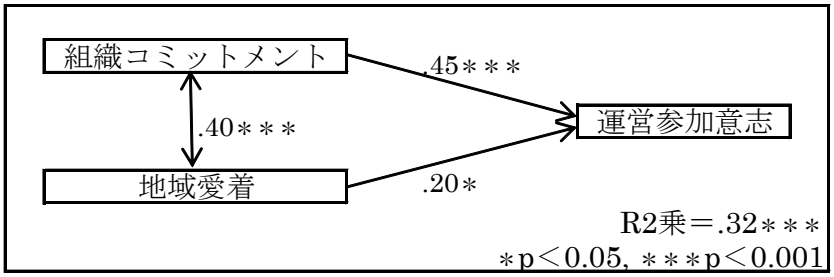

図3　運営参加意志を目的変数とした重回帰分析

(3) まとめ

運営参加意志の関連要因を検証した結果，「組織コミットメント」「地域愛着」「クラブ活動頻度」「集団凝集性」すべてにおいて運営参加意志高群・低群間で有意な差が見られた．運営参加意志の高い方が組織コミットメントが高い傾向が明らかとなり，長積ほか(1998)によって示されている結果と同様のものになった．また，運営参加意志の高い方が地域愛着が高い傾向が明らかとなった．さらに，「組織コミットメント」「地域愛着」の関連要因・規定要因についても運営参加意志との関連が見られ，「クラブ活動頻度」「集団凝集性」が間接的に運営参加意志に影響を与えている可能性が示唆される．

運営参加意志の規定要因を検証した結果，「組織コミットメント」「地域愛着」は運営参加意志に正の影響を与えており，影響度は地域愛着より組織コミットメントの方が高かった．また，組織コミットメントと地域愛着は相関関係にあり，利用店舗への愛着が地域愛着に影響を与える(鈴木・藤井, 2007)ことから，総合型クラブにおいて組織コミットメントが地域愛着に影響を与える可能性が考えられる．運営参加意志と組織コミットメントおよび地域愛着の規定要因に相関がみられることから，「クラブ活動頻度」「集団凝集性」が運営参加意志に間接的に影響を与えていることが推察される．さらに，地域愛着が運営参加意志の規定要因となることが明らかとなり，地域愛着が地域内での協力活動に及ぼす影響(鈴木・藤井, 2008)と同様の結果が得られた．吉野スポーツクラブでは，地域イベントの企画・運営に関わる機会が多いため，クラブ活動を地域活動として捉えており，クラブは公共性が高い組織であるという認識が影響していると考えられる．

6. 会員参加型運営モデルの検証

以上の検証結果をもとに共分散構造分析を行い，会員参加型運営モデル(図 4)について検証した．モデル適合度は，GFI=.989, AGFI=.944, CFI=.998, RMSEA=.024 とすべてが基準値を満たす結果となった．

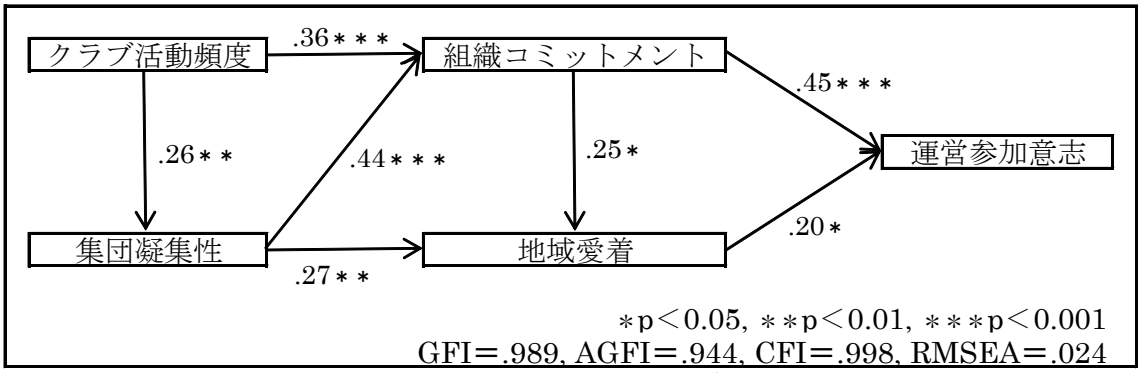

図4 会員参加型運営モデル

Ⅴ．結論

1. まとめ

本研究では，過疎地域における総合型クラブの会員参加型運営に着目し，「組織コミットメント」「地域愛着」「運営参加意志」の関連要因・規定要因を明らかにしたうえで，会員参加型運営モデルについて検証した．その結果，以下の 5 点が明らかとなった．

①組織コミットメントは「クラブ活動頻度」「集団凝集性」によって規定され，集団凝集性の方が影響度が高い．②地域愛着は集団凝集性によって規定される．③運営参加意志は，「組織コミットメント」「地域愛着」によって規定され，組織コミットメントの方が影響度が高い．また，組織コミットメントおよび地域愛着の規定要因である「クラブ活動頻度」「集団凝集性」とも関連がある． ④クラブ活動頻度は集団凝集性に影響を与える．⑤ 組織コミットメントは地域愛着に影響を与える．

2. 実践的示唆

総合型クラブにおいて，会員参加型運営を確立させていく手段として，①魅力的なプログラムを開発し，会員の活動頻度を高めること，②地域のイベントに積極的に関わり，クラブの公共性を会員に認識させること，以上の 2 点が挙げられる．

過疎地域の総合型クラブにおいて，会員の多くが高齢者である可能性が高いため，競技志向ではなく健康志向の種目に重点を置き，会員同士がコミュニケーションを取りやすい環境をつくり，クラブ活動に継続的に参加させることが必要である．

3. 研究課題

本研究では，組織コミットメントに関する項目および集団凝集性に関する項目において，総合型クラブを対象とした尺度が見られないことから，総合型クラブに近い組織形態である大学生サークル(準組織的集団)を対象とした尺度を用いた．そのため，尺度の妥当性が課題として挙げられ，総合型クラブを対象とした尺度を新たに開発する必要がある．

次に，本研究で取り上げた要因以外についても検討していく必要がある．特に，「風土接触度」はクラブ活動頻度と地域愛着を結びつける重要な要因の一つである可能性が示唆されるため，調査項目として加えることが望ましい．

最後に，本研究では過疎地域の総合型クラブを事例に検証したが，都市部の総合型クラブにおいても同様の結果が得られるか検証する必要がある．その際，人口統計学的特性も詳細に把握することが求められる．

引用・参考文献

- 長積仁・冨山浩三・原田宗彦(1998)総合型地域スポーツクラブの置かれた環境と組織行動～クラブ経営組織の環境適応行動と組織コミットメントの関係について～. 徳島大学人間科学研究 6：63-77.
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年(2010)大学生サークル集団におけるコミットメントモデル：準組織的集団の観点からの検討. 実験社会心理学研究 50(1)：76-88.
- 鈴木春菜・藤井聡(2008)地域愛着が地域への協力活動に及ぼす影響に関する研究. 土木計画学研究・論文集 25(2)：357-362.
- 堤理人・赤松宏和・中川義英(2002)地域スポーツの地域活性化効果に関する研究－総合型地域スポーツクラブを対象として－. 都市計画学研究論文集 37：283-288.
- 高橋豪仁・井岡陽子・浦井善宏・小中一弘・若吉浩二(2004)奈良県における総合型地域スポーツクラブの展開－3 つのクラブを事例として－.奈良県教育大学紀要 53(1)：219-229.
- 引地博之・青木俊明・大渕憲一(2009)地域に対する愛着の形成機構－物理的環境と社会的環境の影響－. 土木学会論文集 D65(2)：101-110.
- 窪田誠志・真栄城勉・慶田花英太・仲里健(2010)総合型地域スポーツクラブ運営の実態と課題－全国 60 クラブの調査結果から－. 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 17：87-96.

- 鈴木春菜・藤井聡(2008)「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究. 土木学研究論文集 D64(2)：190-200.
- 二宮浩彰(2011)プロスポーツ観戦者におけるチームに対する愛着とホームタウンへの地域愛着. 同志社大学スポーツ健康科学 3：14-21.
- 二宮浩彰(2008)プロスポーツ・ファンの地域愛着とスポーツ観戦者行動. スポーツ産業学研究 20(1)：97-107.
- 五月女淳(2009)プロスポーツチームと地域愛着に関する研究－観戦者のアイデンティフィケーション、地域愛着に着目して－. 2008 年度早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文.
- 岸翔子(2011)地域への愛着に影響を及ぼす要因に関する研究－地域のスポーツ環境に着目して－. 2010 年度早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文.
- 園田美保(2002)住区への愛着に関する文献研究. 九州大学心理学研究 3：187-196.
- 渡邊勉(2006)地域に対する肯定観の規定因－愛着度、住みやすさ、地域イメージに関する分析－. 地域ブランド研究 2：99-130.
- 鈴木春菜・藤井聡(2007)利用店舗への愛着が地域愛着へ及ぼす影響とその規定因に関する研究. 都市計画研究論文集 43(3)：13-18.
- 引地博之・青木俊明(2005)地域に対する愛着形成の心理過程の検討. 景観・デザイン研究講演集 1：232-235.
- 石盛真徳(2004)コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加：コミュニティ意識尺度の開発を通じて. コミュニティ心理学研究 7(2)：87-98.

- 北村尚宏・松本耕二・國本明徳・仲野隆士(2005)スポーツ・ボランティアの組織コミットメント. 体育学研究 50：37-57.
- 高橋弘司(1997)組織コミットメント尺度の項目特性とその応用可能性－3 次元組織コミットメント尺度を用いて－. 経営行動科学研究 11(2)：123-136.
- 小玉一樹・戸梶亜紀彦(2010)組織同一視の概念研究－組織同一視と組織コミットメントの統合. 広島大学マネジメント研究 10：51-66.
- 小玉一樹(2011)組織同一視尺度の開発と信頼性・妥当性の検討. 広島大学マネジメント研究 11：55-67.
- 萩原剛・藤井聡(2005)交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析. 土木計画学研究講演集.
- 鈴木春菜・藤井聡(2008)「地域風土」への移動と接触が「地域愛着」愛着に及ぼす影響に関する研究. 土木学会論文集 D64(2)：179-189.
- 阿江美恵子(1987)スポーツ集団の凝集性に関する文献研究. 体育学研究 32(2)：117-125.
- 冨永徳之・田口節芳(2006)大学運動部の集団凝集性. 近畿大学工学部紀要人文・社会科学篇 36：23-32.
- 村田真一(2008)総合型地域スポーツクラブにおける「運営参加」に関する比較事例研究. 九州共立大学スポーツ学部研究紀要 2：19-31.
- 中西純司・行實鉄平・村田真一(2011)「新しい公共」を担う総合型地域スポーツクラブの課題と展望. 福岡教育大学紀要 60(5)：77-92.

- 内藤正和(2007)総合型地域スポーツクラブの NPO 法人化に関する研究. 愛知学院大学心身学部紀要 2：9-18.
- 曾根幹子・折本浩一(2008)「総合型地域スポーツクラブ」設立と地域づくりに関する研究－地域スポーツクラブが生む地域社会の活力と再生の可能性. マツダ財団研究報告書 青少年健全育成関係 20：1-12.
- 後藤貴浩(2008)農山村の生活構造と総合型地域スポーツクラブ：生活のあり様とスポーツ実践の関係性に着目して. 体育学研究 53(2)：375-389.
- 斎尾直子・宮川大介(2006)過疎農村地域におけるスポーツネットワークを通した地域づくりに関する研究. 農村計画学会誌 25：299-304.
- 谷口勇一・内倉康二(2010)住民主導を意図した総合型地域スポーツクラブ育成事業における「揺らぎ」の意味と構造. 大分大学教育福祉学部研究紀要 32(2)：201-213.
- Allen, N.J. , & Meyer, J.P(1990)The measurement and antecedents of affective, continuance and normative commitment to the organization. Journal of Occupational Psychology 63：1-18.
- Porter, L. W. , Steers, R. M. , Mowday, R. T. , & Boulian, P. V. (1974)Organizational commitment, job satisfaction, and turnover among psychiatric technicians. Journal of Applied Psychology 59：603-609.
- Cook. J. , & Wall, T. (1980)New work attitude measures of trust , organizational commitment and personal need fulfillment. Journal of Occupational psychology53：39-52.

- Festinger, L., Schachter, S., & Back, K.(1963)Social pressures in informal groups. A study of human factors in housing : Standered University Press California : 77-151.
- Widmeyer, W. N., Brawley, L. R., & Carron, A. V. (1985)The Measurement of Cohesion in Sport Team：The Group Environment Questionnaire. London：Sports Dynamics.
- Hidalgo, M. C. and Hernandez, B. (2001) Place attachment：Conceptual and empirical questions. Journal of environmental psychology 21：273-281.
- 鈴木竜太(2007)組織コミットメント．開本浩矢編，入門組織行動論，中央経済社, pp.31-43.
- 石田正浩(1997)組織コミットメントがもたらすもの．田尾雅夫編，「会社人間の研究」ー組織コミットメントの理論と実際，京都大学学術出版会, pp.101-136.
- 作野誠一(2002)総合型地域スポーツクラブの経営ー自主運営を目指してー．日本体育・スポーツ経営学会編，テキスト総合型地域スポーツクラブ，大修館書店, pp.51-58.
- 中川保敬(2011)地域スポーツクラブとその施策．菊幸一・齋藤健司・真山達志・横山勝彦編著，スポーツ政策論，成文堂, pp.339-361.
- 文部科学省(2010)スポーツ立国戦略ースポーツコミュニティ・ニッポンー.